

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：32621

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13390

研究課題名（和文）近世フランスにおける「ナント王令体制」再考：建築・科学・軍事における宗教論的転回

研究課題名（英文）Rethinking the 'regime of the Edict of Nantes' in early modern France: Religious turn in architecture, science and military affairs

研究代表者

坂野 正則 (SAKANO, Masanori)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：90613406

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：宗派越境的視点と学際的アプローチが本研究の方法論の中核を占めていたため、西洋史学・建築史学・都市史学との学際的研究集団の形成をおこなった。史料調査の実施については、2022年度にロワール地方のソミュールとパリにおいて、オラトリオ会神学校関連の古文書調査を実施した。それ以外にはコロナ禍で刊行史料やオンラインで閲覧できる一次史料の収集・整理・分類をおこなった。

研究成果の公表については、研究前半には、パリ・ノートル＝ダム大聖堂の歴史的再生に関する論文集を出版し、研究最終年度にシンポジウムを実施した。また、18世紀マルセイユのペスト禍に関する論文も公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

17世紀前半のフランスを対象とし、絶対王政の準備期間としてではなく、近世フランス社会の本質が誕生した時代として宗教、とくに宗派間関係を基軸にして社会像を検討しなおす作業は、日本では未開拓の領域であり、それを空間や思想を専門とする研究者と学際的なアプローチで取り組めたことは、大きな学術的意義があると言える。

また、この研究活動の過程で生まれた、パリ・ノートル＝ダム大聖堂の歴史に関する共同研究は、現代パリにおける大聖堂の火災からの復興に関する学術的情報を日本人が正確に獲得することに役立っていることは、本研究のもつ社会的意義を大いに物語っていると言える。

研究成果の概要（英文）：(i) Creation of a new research group: since a trans-confessional perspective and an interdisciplinary approach were central to the methodology of this research, an interdisciplinary research group was formed with Western history, architectural and urban history. (ii) Archival research of France: in 2022, a survey of archives related to the Oratorian seminary was carried out in Saumur and Paris. In addition, we collected and classified primary documents published or digital documents.

(iii) Publication of research results: in the first half of the research, a collection of papers on the historical revival of Paris Notre-Dame Cathedral was published, and a symposium was held in the final year of the research. A paper on the pest of Marseille in the 18th century was also published.

研究分野：西洋史学

キーワード：近世フランス ナント王令 建築史 都市史 科学史 ノートル＝ダム大聖堂 教会建築 17世紀

1. 研究開始当初の背景

17世紀前半のフランス社会については、17世紀後半のルイ14世親政期に比べ、研究の比重は相対的に低く、絶対王政が完成する時期へ向けた助走期間と考えられてきた。これに対して、本研究は、アンリ4世が発布したカトリックとプロテスタントとの宗派間共存を目的としたナント王令に着目し、その発布(1598年)からルイ14世による廃止(1685年)までの時期を「ナント王令体制」の時代と位置づけ、宗派越境的な人材・資本・技術の活用が近世フランス社会の本質を形成したとの仮説に立ち、この時期について、宗教を越えたさまざまな人脈の連関を社会史の中に積極的に位置づけようとするものである。

2. 研究の目的

近世フランス社会におけるカトリックとプロテスタントとの関係が、「ナント王令体制」(1598～1685年)という政治的・時代的背景の中で、どのように築かれ、宗派ごとの教会組織や正統的信仰とは異なる、どのような宗教的感性を生み出したのか、さらにそれが当時のフランス社会の発展にどのように寄与したのかを解明することが本研究の目的であった。この研究を遂行することによって、近年、西洋近世史学界で盛んに議論されつつある宗派(国教)と国家体制との関係に着目する「宗派化」論にも、フランスから具体的な個別事例を提供できると考えられる。さらに、これまで「古典主義」という芸術分野における様式論を主体として当該時期の文化が理解されてきたのに対し、宗教という要素から新たな文化的枠組みを作り出すことができると考えられる。

3. 研究の方法

研究の手法としては、「建築」「科学」「軍事」という3つの異なる領域から考察することで、社会の多面的側面を解明しようとし、そのために学際的研究アプローチを採択した。また、研究内容については、各分野に関わる人物の人物誌に着目することで、単純な絶対王政確立に貢献した人物像を歴史記述に取り入れるのではなく、それぞれの内面的背景を考察することで、宗教的多数派のカトリックと少数派のプロテスタント(カルヴァン派)という固定観念を解体し、両宗派を架橋する枠組みを提示しようとするものである。たとえば、建築分野における古典主義様式は、カトリックの芸術家によってのみ形成されたものではなく、プロテスタントの芸術家も参画して宗派越境的な人材の結集が、国王の下で実現された結果である。そのような点に着目するという点である。分析方法としては、書簡・各種報告書や団体の議事録といった文書史料に加え、実際に残存する建造物や都市に関するフィールド調査も実施する。

4. 研究成果

研究成果は以下の3つに要約することができる。

新たな研究集団の創出：宗派越境的視点と学際的アプローチが本研究の方法論の中核を占めていたため、研究第一年目より西洋史・建築史・科学史・軍事史との学際的研究集団の形成を企画した。実際には、限られた年度計画の中での実施となるため、宗教により近い分野として、美術史や思想史の専門家との研究交流を開始し、定期的に研究会を繰り返す中で、緩やかな研究集団を形成することが可能となった。最終的には、2022年度に「宗教モニュメント研究会」を結成して、現在も活動を継続している。この研究会を通じて、教会堂を軸としながら都市内部にある様々な宗教モニュメントの活用とリノベーションにおける、宗派的性格やその越境性について議論することができた。

史料調査の実施：当初の計画では、3年間フランスでの現地史料調査を実施する予定だったが、あいにく新型コロナウイルスの感染拡大のあおりを受けて海外での史料調査を実施することはかなわなかった。計画の延長を1年間認められ、研究最終年度に当たる2022年度にロワール地方のソミュールとパリにおいて、オラトリオ会神学校関連の古文書調査を実施した。限られた史料調査の期間であったため、研究対象をソミュールという一都市にしばり、プロテスタント神学校(アカデミー)とカトリック神学校(オラトリオ会)との学生・教授の国際交流を基盤とした、新たな都市社会像の構築を試みた。さらに、同地の巡礼に関する史料も入手することができたが、こちらは次の段階での研究展開に貢献しうると考えられる。それ以外の年度には、刊行史料やオンラインで閲覧できる一次史料の収集・整理・分類に費やした。特に、カルヴァン派からカトリックへ改宗したマルセイユ司教ベルザンスの人物誌の調査に集中した。彼の改宗という経験が、のちの宗派的強硬姿勢へとつながり、マルセイユのペスト渦へ及ぼした影響があることを突き止めた。

研究成果の公表：研究前半に実施した学際的研究成果として、パリ・ノートル＝ダム大聖堂の歴史的再生に関する論文集を、都市史・建築史・キリスト教思想史の専門家を結集して出版した。これに関わる様々な研究集会は、日本の学界で本研究を知らせる機会ともなった。研究後半につ

いては、宗教モニュメントに関するシンポジウムを実施した。こちらについても、研究前半に培った研究者人脈が活用できたのみならず、若手の研究者との世代を超えた研究交流も実現できたことで、新たな研究へと展開する基盤を構築することが可能となった。また、18世紀マルセイユのペスト渦に関する論文も公表した。部分的には、本研究の成果の一部をウェブサイトで公表することはおこなっているが、完全な形で整備できていない。早急に、完成させる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 坂野正則 | 4. 巻 373 |
| 2. 論文標題 書評 齋藤晃編『宣教と適応—グローバル・ミッションの近世』 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 西洋史学 | 6. 最初と最後の頁 72-75 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 坂野正則 | 4. 巻 13 |
| 2. 論文標題 ベスト流行下のマルセイユ司教と贖罪空間の生成（1720-1722） | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 上智ヨーロッパ研究 | 6. 最初と最後の頁 39-55 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 坂野正則 | 4. 巻 78 |
| 2. 論文標題 「書評 土居義岳著『建築の聖なるもの—宗教と近代建築の精神史』」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 建築史学 | 6. 最初と最後の頁 171-180 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 坂野正則 | 4. 巻 130-6 |
| 2. 論文標題 「書評 正本忍著『フランス絶対王政の統治構造再考：マレショーセに見る治安、裁判、官僚制』」 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 史学雑誌 | 6. 最初と最後の頁 1066-1075 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 坂野正則 | 4. 巻 65 |
| 2. 論文標題 シンポジウム開催報告 パリ・ノートルダム大聖堂の再生へ向けて：歴史/信仰/空間から考える | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 上智史学 | 6. 最初と最後の頁 185-190 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 坂野 正則 | 4. 巻 993 |
| 2. 論文標題 歴史遺産と信仰空間としてのパリ・ノートル=ダム大聖堂の「再生」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 歴史学研究 | 6. 最初と最後の頁 51-59 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 坂野正則 |
| 2. 発表標題 「フォントヴロ国王修道院のリノベーション」 |
| 3. 学会等名 ジョイントシンポジウム2023「フランスにおける歴史的建造物の建築再生」 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 坂野正則 |
| 2. 発表標題 Trajectory of joint research about urban and territorial history between Occidental history and architectural history in Japan with France as research field |
| 3. 学会等名 1st Research Meeting with Centre de la Mediterranee moderne et contemporaine of the Cote d'Azur University |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 坂野正則 |
| 2. 発表標題 「問題提起：歴史遺産・信仰空間としてのパリ・ノートルダム大聖堂」 |
| 3. 学会等名 科研シンポジウム「パリ・ノートルダム大聖堂の再生へ向けて 歴史／信仰／空間から考える 」 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|---------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 中野 隆生、加藤 玄、加藤耕一、嵩井里恵子、坂野正則等 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 明石書店 | 5. 総ページ数 388 |
| 3. 書名 フランスの歴史を知るための50章 | |

| | |
|-----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 坂野正則 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 勉誠出版 | 5. 総ページ数 288 |
| 3. 書名 パリ・ノートルダム大聖堂の伝統と再生 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

| 6. 研究組織 | | |
|---------------------------|-----------------------|----|
| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|